

アジア太平洋研究科 博士学位論文要旨

コリアンの国際移動とナショナリズム —近現代における「同胞」言説の系譜と再検討—

4003s323-7, Kyung-soo RHA, 羅京洙

主指導教員 後藤乾一教授

Keywords : コリアンの国際移動, ナショナリズム, 同胞, 国家, 個人, アイデンティティ

本博士学位請求論文の目的は、マイグレーションとナショナリズムの相互関係を解明することにある。すなわち、国境を越える人々の国際移動と国家のナショナリズムが根深い関わり合いを持つということをも本論文の仮説とし、両者の関係性をコリアンの事例から実証する。具体的には、コリアンの国際移動という行為がナショナリズムとは不可分の関係の中で規定されてきたという歴史と現状に焦点をあてつつ、その関係性の「本質」と「文脈」を明らかにする。

現在、およそ 682 万人のコリアンが全世界の 170 余の国家・地域で暮らしている。なぜこれほど多くのコリアンが、生まれ育った元々の生活共同体を離れて国際移動を続けているのか、移動を通じて彼らのアイデンティティがどのように変容していったのかなど、さまざまな側面を持つ彼らの国際移動に大きな関心が寄せられている。

本論文は、「個人」と「国家」を両軸とする新たな視点から、コリアンの国際移動を捉え直そうとするものである。これまで国家のナショナリズムが当たり前のように作り上げてきた「同胞」という言説の論理によってコリアンの国際移動が規定され、移動する主体であるコリアン個々人もその「同胞」の一員になることをそのまま受け止めてきたのではないか。しかし、ナショナリズムによる「同胞」というこの言説は、果たしてどのようなものであったのか。実体はあったのか。あるいは、単に作り上げられた「虚像」ではなかったのか。本論文では、移動するコリアンのアイデンティティを集団化させるこの「同胞」言説の本質に迫る。この作業によって、コリアンの国際移動の本質もより明確になると考えるからである。現在のところ、「国家」と「個人」の二者を相互対峙させ、コリアンの国際移動を総合的かつ理論的に検討したものはほとんど見当たらない。本論文は、これまで皆無に近かった「個人」の視点を積極的に取り上げ、ナショナリズムに根ざしている従来の分析枠組みに対する異説を提示する試みである。以上の問題意識をふまえ、本論文の章立ては次のとおりとする。

序 章 課題と方法

第 1 章 人の国際移動に関する理論的検討

第 2 章 コリアンの国際移動の歴史的背景

第 3 章 移動とナショナリズム：つくられた「同胞」の神話

第 4 章 移動とアイデンティティ：ゆれうごく「個人」の帰属性

第 5 章 移動とリージョナリズム：東アジアにおける人と文化の「域際性」

終 章 意義と展望

ここでは、本論文の学問的位置づけを明らかにしておきたい。本論文は、国境を越えるコリアンの国際移動という現象をどのように認識すればよいのか、その方法論と視点の「省察」と「模索」を試みたものである。すなわち本論文は、これまで当然のように思われてきた「国家」のナショナリズムに影響される「個人」の国際移動に内在する構造的な問題に迫り、その学問的検討の矢をまずは「コリアン」に向けて「内省的考察」を行ったものである。こうした考えに基づく本論文は、「個人」と「国家」という両軸を相互交差させ、そこから見えてくる両者の相関性を再考するための「新しい観点」を模索したものとして位置づけられる。

以上の学問的位置づけに基づきながら、以下では本論文の具体的な意義を挙げたい。第一に、新しい理論的枠組みを提示したことである。

本論文では、「移民」という近代的概念の限界を批判的にとらえ、普遍性と主体性を保つ「移動」という概念で国境を越えるコリアンを把握した。第二に、近現代における「同胞」という言説の系譜に関する概念史的考察を行ったことである。この「同胞」言説の再検討を行うために、「越境コリアンはナショナリズムから自由ではない」という仮説を立て、その仮説をさまざまな方法論を用いて立証しようとしたのである。第三に、「個人」の視点を重んじつつ論を進めた。人の国際移動の本質が「一個人のよりよい人生を営むため」であるということとは、越境するコリアンも例外ではない。国家や民族を本位とする移動（移民）史はその集団性が過度に強調されやすく、その集団を構成する一人一人の個人に焦点を合わせる移動生活史の領域が相対的に軽く思われる恐れがある。とくに、「独立運動」と「国家発展」という近現代の時代的使命を尽くしてきた越境コリアンの場合はより顕著である。本論文では、「底辺」で生きる人々や個人のさまざまな移動生活史を積極的に描き出そうとしたのである。第四に、その「底辺」で生きる越境コリアンのアイデンティティを重層的なものとして捉えなおそうとした。そのため、これまでそれほど知られてこなかった人物や集団の国際移動を事例として取り上げ、それらを通じ、移動する主体としての彼らが「民族」、「同胞」、「国民」、そして「個人」として如何に自己アイデンティティを確立していくのかを検討した。

本論文は、コリアンの国際移動という現象の実態を明らかにし、その裏面にある「同胞」という言説に隠されたナショナリズムを真正面から解き開き、これまで試みることのなかった新しい視点の提示をある程度達成できたと考える。移動するコリアンを「同胞」言説で定義・規定するということ自体は、その実体があるというよりは、国民国家のナショナリズムを実践するために使われてきた政治的スローガンに過ぎない。その意味から、「同胞」という言説は国家政府によって意図的に企画され、作り上げられた「神話」であったことを再度強調しておきたい。最後になるが、コリアンの国際移動における本質とは、つくられた神話である「同胞」ではない。その本質はやはり「ヒト」である。

【主要参考文献】

『垂細亜公論』（1922 年～1923 年）

『太平洋雑誌』（1913 年～1930 年）

『海外開発報』（1976 年～1988 年）